

### 33. 獨協医大泌尿器科で施行したロボット支援前立腺全摘術 146 例の検討

泌尿器科学 前立腺センター  
排泄機能センター

西原大策, 安土正裕, 水野智弥, 幸 英夫,  
増田聡雅, 神原常仁, 別納弘法, 阿部英行,  
深堀能立, 加賀勘家, 山西友典, 釜井隆男

【目的】獨協医科大学では2012年末よりロボット支援前立腺全摘術(Robot-assisted radical prostatectomy, RARP)を開始し, 95%の症例がRARPに移行した。現在, 100例/年間超のペースで症例が蓄積されている。これまでの症例解析から今後の課題を見いだす。

【方法】RARP146症例を対象に, 周術期データの記述統計および時期別の手術パラメータの比較統計を行った。統計はR(The R Foundation for Statistical Computing, version 2.13.0)を用いた。

【結果】総手術時間, コンソール時間, 出血量, 尿道カテ留置期間, 入院日数はそれぞれ197分, 159分, 257 mL, 5.5日, 10.4日であり, 同種血輸血や開放手術への移行を必要とした症例は皆無, Clavien-Dindo (CD) III合併症率4.3%であった。神経温存(片側/両側)はおおよそ2/3の症例で施行されたが, 病理学断端陽性率はpT2以下3.1%, pT3a 53.8%, pT3b 28.6%であった。尿禁制獲得は術後1ヶ月と3ヶ月で65.1%, 93.2%であった。コンソール時間, 膀胱頸部離断や膀胱尿道吻合などの手術パラメータをRARP導入から3期に分け比較すると, 導入期から中期の改善が顕著であり, 後期では統計有意差には至らないものの, 素データの改善を認めた。

【結論】RARP導入2年程度の周術期成績としては諸家の報告と比較して良好な結果であった。特に機能温存成績は良好であるが, T3癌の断端陽性率は未だに高く推移しており, 拡大切除や郭清など手術アプローチを再考すべき課題が明確になった。

### 34. 針刺し切創の減少を目的とした安全教育プログラムに対する新人看護師の評価

<sup>1)</sup>公衆衛生学, <sup>2)</sup>看護部, <sup>3)</sup>感染制御・臨床検査医学, <sup>4)</sup>医療安全推進センター  
梅澤光政<sup>1)</sup>, 佐山静江<sup>2)</sup>, 福島篤仁<sup>3)</sup>,  
橋本美雪<sup>4)</sup>

【目的】針刺し・切創は医療従事者に職業感染を生じる重要な課題であり, これを減らすための研究が進められている。しかし, その知見を取り入れた教育を実施した報告は少ない。我々は研究の知見や新しい教育手法を取り入れた安全教育プログラムを新人看護師に実施し, 針刺し・切創予防に有効な知識・経験の蓄積につながるかを検討した。

【方法】獨協医科大学病院に平成26年度に入職した新卒看護師98人を対象とした。研究参加について全員から同意を得た。対象者に, 小テスト, 研究の知見を取り入れた講義, ビデオ教材を用いた針捨てに関する学習, 小人数グループワークによる症例検討からなる安全教育プログラムを実施した。プログラムの最後にアンケートを実施し全員から回答を得た。アンケートは満足度等を選択肢法で問い, 印象に残ったことを自由記載とした。

【結果】94%の対象者が安全教育プログラムについて「満足」・「とても満足」と回答した。残りの6%は「やや不満」と答えた。プログラムの内容として印象に残ったことには69人が回答した(うち3人が複数の内容を記入)。内容ごとに件数を集計したところ, 講義関連が32件, 針捨て関連が17件, 症例検討関連が23件であった。

【考察】研究の知見, ビデオや症例検討を取り入れた安全教育プログラムは新人看護師から一定の評価を得た。今後, 追跡調査を行い, 針刺し・切創の発生率や, 知識・記憶の定着率について調査を進めていくことを予定している。

【謝辞】本研究に参加いただきました新人看護師の皆様には深くお礼申し上げます。また, 研究の遂行にご協力をいただきました獨協医科大学病院看護部, 感染制御センター, 医療安全推進センターの皆様には厚く感謝の意を表します。